

CONTENTS

文化庁月報

1995 **2** No.317

特集 ● 技術の発達・メディアの多様化に伴い変わりゆく著作物の利用

■ 巻頭言 著作権の変容	佐野文一郎	4
情報化社会についての若干の覚書	阿部 浩二	6
教育・マルチメディア・著作権	北川善太郎	9
■ 新たな著作物の利用形態への対応		
ゆらぎのなかの著作権	合庭 惇	12
手探りの放送番組活用	射場 俊郎	13
どんな未来を創ろうか	丹野 章	14
著作物としてのマルチメディアソフト	中島 誠一	15
標準化と知的所有権	水野 幸男	16
著作権審議会等における検討状況	文化庁著作権課	17

都道府県のページ

ご存じですか? こんな文化財⑩	
長保寺、徳川家墓所	22
一度は行きたい博物館・美術館⑫	
広島市現代美術館	25

ACA[Agency for Cultural Affairs]NEWS

・ 音楽文化振興法の概要	29
・ 地域文化フォーラムの開設	29
・ 平成6年度(第49回)芸術祭賞決まる	30
・ 平成7年度著作権セミナーの開催	32
・ 「世界文化遺産奈良コンファレンス」の開催	32
・ 重要文化財の新指定(無形民俗文化財関係)	34

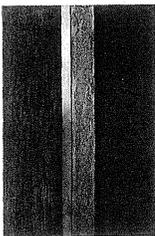
イベント案内

森口宏一展/国立国際美術館	43
ピーター・ヴォーコス展/京都国立近代美術館	44
浮世絵とタビスリー/東京国立博物館	45

● 著作権法利用講座⑬	28
● 芸術文化振興基金ニュース	46
● 今月の国立劇場	47
● 編集後記	48

ちよつと一息

日本文化と茶の湯/千宗室20



Untitled 91-14
 宮井里夏/作(平成5年度文化庁買上作品)
 みやい・りか/昭和39年宮城県生まれ。武蔵野美術大学大学院美術専攻科在学中の平成元年に神奈川県美術展特選。以後、日本国際美術展京都国立近代美術館賞(平成2年)、エンパ賞美術展新人賞(3年)、日本版画協会展新人賞(3年)など。現在は日本版画協会準会員。

日本文化と茶の湯

千 宗室

毎年、春秋の二回、私が日本文化史茶道の講義を承っている。外務省研修所（秋の各省よりの海外派遣者）の実施研修とこれとはまた別に年一回の行事となった、松下政経塾の茶道研修に立ち会って、茶道文化についての話をすることができた。

外務省の研修はもうかれこれ二十年近く続いており、東京晋羽の護国寺近くにあった外務省研修所に出かけていたが、数年前から京都や奈良の実地見学とともに私どもの茶室に来て下さることになった。茶の実技点前と、客のなり方などの勉強とともに重要文化財に指定されている裏千家今日庵の茶室茶庭の拝観により、茶道文化に直接ふれて見聞を広めてもらうためである。

また、松下政経塾は塾生が指導者とともに二泊三日の研修で、早朝の座禅から始まって作務（庭掃除など）、茶の点前、実技及び講義を三日間、朝から夜まで続けるのである。いずれも茶のいただき方や点前を中心に茶道文化にふれて日本の伝統文化の粹を理解し、少しでも将来に役立ってもらおうということである。

十年前と比べると隔世の感がある。私が言う隔世の感というのは、次のようなことである。十年近く前は、茶の研修というと、まずそんな窮屈なことは免こうむりたいというような表情がしばしば参加する人達にあつたように思ったからである。ところが近頃は、素直な心と態度で接してくれ、それは少なくとも知らぬことを知ろうとする努力のあることを感じるのである。近頃では地方公共団体や会社、学園又スポーツ関係などの各種催しでは、まずこそつて茶席や呈茶席が設けられ実習即ちデモンストレーションが解説付きで行われるのだが、最早それも珍しいことではなくなつたし、男性が多く喫茶する姿を見かけられるようになってきた。

明治政府の欧化思想と富国強兵策によつてもすれば捨ててしまわれたように扱われた伝統文化が、二十一世紀を目前に控えた今、広範囲に復活したとすることができるのではなからうか。ポストン美術館の東洋部長を務めた岡倉天心が、明治三十九年（一九〇六年）に日本文化を紹介しようとして書いた『茶の本』以来、一世紀近く経過して、伝統文化の粹といわれる茶道は日本を代表するものとして内外に理解されるようになってきたといえるのである。

申すまでもなく「文化」(CULTURE)とは「心を耕す」ものである。茶道に限らず伝統文化とは、心の琴線に触れる何物かを持つものである。とりわけ茶道は、谷川徹三氏が、『茶の美学』で言われたように「芸術性」「哲学性」「道徳性」「社交性」というファクターを備えており、更に「修道性」「宗教性」をも包含しているといえよう。茶道文化を構成しているこれらの六

ちよつと一息

文化の香りきあひたに

つのファクターは、それぞれが独立して存在するのではなく、相互に関連しつつ展開しているところに特色がある。

数年前のことであるが、中国で「私たちは客に茶をお出しする時、(清茶一杯)といつて出すようにしています」と言われたことがある。たつた一杯の茶ではあるが、心を込めた一杯であるという意味であろう。千利休は「茶湯を医するのみ」といつているが、その原点は喉の渴きを止めるための飲み物であり、薬種の一つであった。また、世界中に広がっている各種の飲み物で、喉の渴きを止める以上の意味を持つているものは皆無である。しかしながら、一盃の茶を喫することを根底に据えながら、総合的な生活芸術の世界を創り出し得たのは、茶道をおいではかにはあり得ない。

茶道とは、食事と茶を喫するという日常的行為の中から、四時間、すなわち二刻を使った一幕の「ドラマ」に仕立て上げられた生活文化芸術である。そうした日常の行為を繰り返しながら、高い精神性を生み出すところに茶道の特色がある。我が国には能楽や歌舞伎、文楽狂言等という多くの伝統芸術が存在する。しかし、これらの多くは、非日常の世界の中で遊ぶ精神性を持つたものであるのに対し、茶道とは全く異なった精神性を持つ特異な文化芸術なのである。懐石料理が出される一幕目にしても、濃茶・薄茶が出される二幕目で取り合われる茶道具にしても、観賞中心に造られた器ではなく、全て用の美を基本にしていなければ、使用に耐えないものとなってしまう。

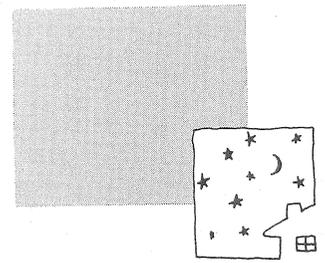
心のこもつた一盃の茶と、心をこめた食事即ち一汁三菜の懐石料理を出す中から、高い精神性を生み出している茶道文化は言いかえれば、世界に誇ることでできるサロン文化だということができる。しかもそれは、四季の移ろいをそのままに取り入れたもてなしの文化でもある。自然を友とし、自然とともに融合一体化することで進展してきた日本人は禅の精神の注入によって、茶禅一味という高い精神性を育ててきた。客を心からもてなして、一座建立をはかる中から生まれた「一期一会」の心と「和敬清寂」の精神を大切にす茶道とは、つまるところ人間愛の美学だといえることができるのではなからうか。



せん・そうしつ／1923年生まれ。茶道裏千家家元。千利休居士より第十五代。斎号、鶴雲斎。国際的な広い視野で、茶道文化の浸透・発展と世界平和をはかり、世界50ヶ国以上を歴訪“一盃からピースフルネス”提唱。現在、京都市国際交流協会、京都市社会教育財団・平安建都1200年記念協会の各理事長、京都府公安委員、アジア馬術連盟会長、等100以上の役職をもつ。ハワイ大学教授、モスクワ大学名誉教授、中国南開大学顧問教授に就任。中国国務院哲学博士の学位授与。平成元年文化功労者。平成六年春、勲二等旭日重光章。

2月文化庁行事予定

1日・都道府県・指定都市文化行政主管部課長会議（都道府県会館）
17日・文化財保護審議会（文化庁）



文化庁月報 2月号 (通巻317号)

平成7年2月25日印刷・発行

編集—文化庁
〒100 東京都千代田区霞が関3-2-2
発行—株式会社ぎょうせい
本社 〒104 東京都中央区銀座7-4-12
本部 〒167 東京都杉並区荻窪4-30-16
電話 編集 03(3571)2126
販売 03(5349)6666
振替口座 00190-0-161
印刷所—㈱行政学会印刷所

定価530円（本体515円）送料76円
年間購読料6360円
本誌のご購読のお申し込みは、直接弊社の本・支社、
あるいは最寄りの書店へお申し込みください。

広告の問い合わせ・申し込み先
㈱ぎょうせい営業第一課宣伝係
電話03(5349)6657 (ダイヤルイン)
©1995 Printed in Japan
ISSN 0916-9849

編集後記

先日、宮城県三本木町にある山畑横穴古墳群（国指定史跡）
を見て来ました。同古墳は、日本の最北端に位置する装飾古墳
で、残念ながら直に見ることはできませんでしたが、隣接する
古墳資料展示室で、その模型や写真を見ることができました。
東北の装飾古墳としては、福島県にある滑戸迫横穴や中田横穴
なども有名で、これらは年に数回公開日を設けているので、そ
の神秘的な模様を間近に見て感激したことがあります。
これらの装飾壁画は、同心円文や人物像からなる極めてプリ
ミティブな模様で、全国的に有名な飛鳥の高松塚古墳壁画のよ
うに大陸から伝来した高度な技術のものではなく、我が国固有
の風土の中で育まれた原始的な芸術作品であると考えられ、非
常に興味深いものです。やはり、芸術というものは、人間の本
来的、根源的な欲求であるということを感じました次第です。
さて、今月号は著作権の特集です。法律上、著作物とは、「思
想又は感情を創作的に表現したものであって、文芸、学術、美
術又は音楽の範囲に属するもの」とされており、装飾壁画も立
派な著作物といえます。著作権という思想のなかった古代にお
いては、壁画の盗作ということもあつたのではないかとこのよ
うなことをつれづれ考えています。
(栗)